

 街談
巷議

アメリカの中国研究についての見聞記

(東京都立大学) 坂元 ひろ子

「中国なき中国研究」が問題なのは論をまたない。では、どうやら日本の大学の蛸つぼ型の講座制とも密接な関係をもつ、いわばオタッキーな「日本でしか通用しない中国研究」はどうか。日本語の使用からして、言語の「帝国主義」めいた英語の使用と比べて不利だという事情はある。それでも他国での研究と対話可能で、現に重視されている研究が皆無なわけではない。だが、さまざまな分野、局面で日本が指弾されているように、この分野でも、全体として 'close' だとの印象は免れない。さすがに中国との学术交流は増えてきたものの、日本人側はともすると資料漁りに没頭しがちで、知的交流になりえていないかはおも大いに疑問だ。

このたび「脱亜」を思い立ち、世界各地からの研究者を受け入れているアメリカの一隅に身をおいてみた。彼の地より眺めれば、日本の研究群はやはり、中国語圏と欧米言語圏の研究の知的交通から離れて、孤島を守っているように見えた。自己反省も込めてのことだが、閉鎖性突破に向け、せめて現実的な情報を供しておきたいと思う。

§ 1. ハーバード大フェアバンク・センター

前の勤務先、山口大学教養部から海外研修の形で、私はハーバード大学フェアバンク・センター The Fairbank Center for East Asian Research に1991年夏から93年春先まで滞在する機会を得た。このセンターへの訪問学者の受入れは理事会で決められており、私の場合は、中国での学会に何度かともに出席して親しくなった林毓生氏の推薦により、同センター理事のベンジャミン・シュオルツ氏の協力を得たことで迎えられた。

私が到着して間もなく亡くなった、アメリカに

おける中国近代史学の開山ともいべきジョン・フェアバンクの名を冠したこの研究センターは、アメリカでの中国学において今も大きな役割を果たしている。ハーバード各学部（歴史・人類学・社会学・政治学等）及び近隣の大学所属のアジア学の研究者たちが常時、籍をおいてオフィスをもつだけでなく、近現代を中心とした中国学の諸分野の研究者および研究協力者が国内外から相当数、ここで研修する。韓国・朝鮮部門も、研究所長がフェアバンク・センターの理事会メンバーとなり、オフィスも同所に置かれることになった。所長は、昨夏までは中国共産党史研究で有名なマックファーカー R. MacFarquhar 氏、その後は広東中心の文化人類学で知られるジェイムズ・ワトソン J. Watson 氏が引き継いでいる。

このセンターの主な活動は、研修の受入先となっていくつもの研究プロジェクトを推進し、その成果を発表するほか、図書室（この書籍数は多くはなく、さまざまな理由から、中国共産党史関係に偏っている）の運営、各種の公開セミナー（毎週）やワークショップの開催、そしてニュー・イングランド・セミナー（会員はこの地域の人だが、全国から講師を招く中国学会）や各種シンポジウムの開催母体や後援団体となることだ。また、今年からは未出版の本に対するフェアバンク賞も出すことになった。

随時—多い時はほとんど毎日のように一開かれる同センターのセミナーおよび定期的なニュー・イングランド・セミナーの組織運営は、ボストン大学のマール・ゴールドマン M. Goldman 氏が采配をふるっていた。彼女はフェアバンクの高弟の一人にして同センター理事、同センターの中

心人物のひとりで、五四から現在の中国知識人の研究で知られる。その夫(マーシャル)も同じ建物内のロシア研究センターで活躍し、ソ連解体時には毎日のようにテレビに登場したロシア学の権威だけあって、彼女は国際関係への目配りがきく。また中国の人権問題で活躍していて、ブッシュ時代にもベーカー長官から諮問されたりはしていたようだが、彼女の支持する民主党のクリントン政権からは、人権問題の国連委員会への代表に任命されている。それだけに、いわゆる天安門事件がらみの人権問題に焦点をあわせた人選、セミナーの設定が目立ち、そこにある種の「西欧中心主義」を嗅ぎつけ、批判的な人々もいないわけではなかった。ちなみにビジネス部門は別だろうが、ここに集まった中国学者たちはほとんどみな民主党支持者、しかも熱烈なそれだ。特に逆転劇でもりあがった大統領選があった時期だけに、かたや中国や台湾からの訪問学者がほぼ軒並み共和党びいきなのと際立った対照をなしているのが印象的だった。

それにしても、国内外各地の研究者の現時点での関心事がいながらにして直接知りうるのは(実際、会いたかったアメリカの学者の大半とここで会えた)、日本のように情報の一ないし二極への集中のないアメリカでは、ことに貴重というべきだ。

中国学だけでも他分野にわたるし、数年来、続々と渡米してきた中国知識人(蘇紹智、戴晴、王若望、王若水氏、またプリンストンにいる蘇曉康氏ら)とも常時、接触が可能となる。また、同センターと同じビルにある日本研究(ライシャワー・センターと米日関係プログラム)やロシア、韓国・朝鮮、国際事情等の各研究センター等のセミナーも同時平行でなされているだけに、パノラマ的に視角を広げるには恰好の条件が備わっている。ただ、それ以前、教養部に籍をおいていた私の関心からの難をいえば、哲学・文学や理科系の関係者が常時、集う場所ではないという点ということに

なろう。

さて、センターによる大きなシンポジウムの組織では、アメリカでも全国規模では初めてという、女性に焦点を当てて中国をジェンダー(日本でみられるイリイチー玉野井的な意味に限定されていない)という視角から検討する、画期的なシンポジウム *Engendering China — Chinese women, culture and the state* の開催が昨年二月にあった。若手の女性研究者の尽力があつての実現だが、ゴールドマン女史の組織上の手腕もまた無視できないだろう。開催は四日間にわたり、中国や台湾から招いた研究者はもとより、国内のC.ファース、S.ナキャンら司会者・パネラー・コメンテーターのいずれもほとんど女性を連ねた。その数、七、八十人にもものぼろうか。内容的にはまだ事始めという印象が否めず、中国とアメリカの研究者の議論のすれ違いも目立ったとはいえ、まことに壮観、羨ましい限りだった。日本にどれだけの女性の中国学研究者がいるだろうか。ジェンダーという視角からして十分に重視されていないこともあわせ、これらの点でも孤立だ。なお、この時のペーパーは今年にもハーバード大から出版予定だという。もう一つセンターの後援で、中国におけるユダヤ人の問題をとりあげた大集会が昨年八月にあった。 *Jewish Diasporas in China: Comparative and Historical Perspectives* で、中国のほか、日本も含め、世界各地から学者を呼び、三日にわたるシンポを展開した。これは、古代、開封のユダヤ人と上海を根城にしたユダヤ人財閥、そしてナチ期に難を逃れて流れてきたユダヤ人の問題を連続させるには、シュオルツ氏のコメントにもあったことだが、無理があった。それでも、激論が戦わされ、中国学ではユダヤ人はマイナーとはいえ、アメリカで、ユダヤ人といっても想像以上に多様化していること、大戦中、一部日本外交官が避難に協力したことへの積極的な評価など、興味を引くことは多かった。

もっと小規模な研究会、普通月一回の各ワークショップはそれぞれの専門の人が運営に当たっている。たとえば中国・台湾のニュースを追うのに重宝した「現代事情」は政治学や経済学のプロパーが共同で、新しく発足したジェンダー学はハーバードに移ったばかりのルービー・ワトソン（所属は美術館、専門は所長の夫と同じく文化人類学）氏や近くの大学の若手クリス・ギルマーティン氏が、台湾学はハーバードの民国史のカービー W. Kirby 氏、現在は準備段階のベトナム学のはハーバード歴史学のタム・タイ Hue-Tam Ho Tai 氏といった具合だ。ここでも女性研究者が大活躍している。

それと特筆すべきなのは、毎昼食時、同じ建物内のカフェテリアにおける「非公式の集まり」だ。フェアバンク現役時以来の「チャイナ・テーブル」は今も続き、これは他分野の人たちも羨んでいる。たまたまハーバードにやって来たアジア学研究者もよく顔を出し、私には耳学問、情報収拾のまたとない場であった。全国の学者の研究動向、新本紹介、授業の様子から大統領選をはじめさまざまなレベルの政治の話まで、話題は尽きることない。羨ましいことに、論文や本の公表前に原稿を回して読みあう習慣があるが、その交渉の場にも使われる。近くの名門女子大 (Wellesley College) 所属でセンター理事のポール・コーエン氏やアドバイザーともいふべき、B. シュオルツ氏ともほとんど毎日のように昼食をともしながら話をする（もちろん聞く方が圧倒的に多かったが）ことができた。すでに教授職は退いたシュオルツ氏は「チャイナ・テーブル」の常連にしてそこに欠かせない主役でもある。フェアバンクとともにこのセンターを作り上げた最大の功労者だということには誰しも異存ないだろう。厳復を論じた彼の主著の翻訳版の数は彼自身の把握をこえるが、皮肉なことに、彼の手がける思想史は今やマイナーな領域となっている。

ハーバードの東アジア学は当センターに集まる各学部所属の他、言語と文学の分野は、これもアメリカでは多い、東アジア言語・文明部 East Asian Languages and Civilizations（略称 EALC）に属する。これはフェアバンク・センターから徒歩五分程度のところに位置する燕京図書館と同じ建物にオフィスをおいている。その代表者、杜維明氏は「儒教第三期発展」説（これはさすがに不人気だったとか）に続く「文化中国」cultural China説で海外華人のネットワークを作りつつある。だが、近現代文学や前近代中国研究者を含む EALC の所属の人たちは、月一度、前近代中国セミナーを開催する以外はあまりセンターに足を運ばないのが残念だったが。

§ 2. ハーバード燕京図書館

所属したセンターの図書は私の専門ではさして利用価値はなかったのに、オフィスはもらったが、図書を見るのはアメリカで最も充実したアジア関係図書館のひとつ、燕京図書館が主となった。アメリカの大学の常として燕京図書館の方は学期中は夜十時まで開いているし（治安の極めてよい非都市部の大学は、十二時まで開く）、善本室の本を除き、旧雑誌等も自由にコピーができる。大量の本を長期に貸し出してくれ、また書庫内の閲覧用小デスクを提供され、そこに本をストックしておくことも可能だったので、非常に便利であった。多くが中国・台湾・韓国出身者で占める司書がとても親切で、利用が管理に優先するという当然のことが本当に行われているという点で、印象に残る。普通の図書館業務の他、たとえば新しく購入した二十五史引得コンピューター・ソフトの使用講習会なども行ったりしている。望むらくは、大変な困難を伴うとはいえ、漢籍のコンピューターへの入力実現の早からんことを。また、どこでも探すのに苦労しているらしいが、日本における日本以外のアジア学に詳しい司書を早く確保して欲しいものだ。こんなことから日本における研究

の孤立化にみすみす拍車がかかってしまうのは残念だ。とても保存の意味がないものが多々ある一方、代表的な研究書がまま備わっていない。

ここの図書を利用し尽くす時間的余裕はともななかったが、専門の関係からいっても、民国期の雑本、雑誌が豊富なものには目を奪われ、それらのコピーに相当、時間を割くことになった。また帰国近くなって、ハーバード滞在中の京都大学人文研の水野直樹氏のアドバイスもあり、善本室に通い、一生の多くをYMCA活動を通して中国をはじめアジア各地で過ごした宣教師のJ. フィッチの文書を手分けしてチェックしたりもした。これは宣教師の中国観に興味をもったことだったが、まずは四十数個にもなる大箱に手紙・手稿・印刷物から写真、各種の記念品にいたるまでがほとんど無秩序の状態で詰め込まれているのには望洋興嘆のみ。それでも、反共の宣教師ながら延安にかけつけた時の周恩来の招請状に意外な思いをもったり、南京虐殺時に南京に止まった数少ない外国人の一人であることを思い出させる丸秘印の手紙類が目にとまり、最近日本で刊行された資料集にも未収のその惨状の記述に釘付けになったりもした。こうした未整理のアーカイブ類は他にも多い。胡漢民関係のもそのひとつで、これらはコピーが自由にはできないこともあり、時間的にみてやはりここの研究者なり大学院生の研究に委ねた方がよいと判断し、関係者にその旨、伝えるほかなかった。ともかく資料には事欠かない、という印象をもった。

なお燕京図書館を含むYenching Instituteでは毎年、四十歳くらいまでの東アジア各国の研究者を招き、十一ヶ月分の生活費（ただし一人分程度）と往復旅費を支給している。限られた大学にしか募集がゆかず、私も応募し損ねたが、実は直接、応募することも可能だということなので、志ある方には試みられるようお勧めする。

§ 3. その他

ハーバードでは、たとえば、キューン、カービー、ワトソン氏らの大学院ゼミに出席し、貴重な体験もえた。中国関係では、大学院生は日本と同様、アジアからの留学生が大半を占める。学生の人気は文化人類学かE. ボーゲルやA. ウォルターらのいる社会科学系に傾いている。日本とは逆に、学生は概して、高校まであまり勉強していないせいか、大学での向学意欲は強く、また各科目で読書リストが配られて多くの読書が要求されるだけに、実際よく勉強し、よく質問するので気持ちがよい。学生による教師の評価というのもこういう環境であれば生まれるであろう。もちろん学生も教師もテンションが高いわけで、弁論術も鍛えられてゆくゼミには舌を巻くばかり。システマティックな教育で、博士論文取得や常勤職の獲得のために理論を競うには確かに適している。反面、日本では主流の文献の詳細な読み合わせ方式は非常に少ないため、古漢文の読書力では問題が多いが、これは台湾への留学や数多い優秀な中国人留学生の活用で補おうとしているようだ。

ハーバード関係で紙幅を費やしてしまったが、AASの年次大会に参加したし、林毓生氏に招かれ、ようやく出国が実現した李沢厚氏とも再会することのできたウィスコンシン大学をはじめ、ミシガン、コネール、プリンストン等の多くの大学も訪問、帰国途上には明・清研究の盛んなUCLAに立ち寄り、それぞれ収穫を得た。各地で世界各国からの、とりわけ従来、近くて遠くもあった韓国や台湾からの若手研究者との交流ができたことは望外の喜びであったことを言い添えておきたい。今後の研究視野の拡大、私なりに目指す「日本でしか通用しない中国研究」打開の努力に鍵となる交流であったと信じるからだ。